

※字数指定のある問いでは、特にことわりのない限り、句読点等の符号も一字分と数えます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈問題文中の※は、終わりに注があります。また、問題文の表記を一部書き改めてあります。〉

私たちのうちには、いつでも成功したいという気もちが隠れております。このばあい成功というのは、なにも大政治家になつたり、大芸術家になつたりすることを意味しません。もちろんそういうことも含めていいのですが、もっと小さなこと、

A 1、みなさんが学校でいい成績をおさめたいとおもうこと、先生の質問に適切な答えをしたいとおもうこと、

キョウギで敵を破りたいとおもうこと、さらに学校を出て、いいところへ就職したいとおもう、好きなひとに愛されたいとおもう、職場でも、交友関係でも、家庭でも、無くてはならぬひとになりたいとおもう。つまり一口にいえば、どこでもかしこでも「いい子」になりたいということであり、どんな小さな行為でも、やろうとおもって手をつけたことは、うまくやりとおしたいということでもあります。それは人情の自然で、誰にもあることです。

そして、自分のやることがうまくいっているあいだは、それらがすべて自分の力でなしたものであり、自分の力以外に①なんの理由も原因もない。誰しもそうおもいたがるものです。

2、それがひとたび失敗すると、どうなるか。それまで成功しているあいだは、すべては自分から出たものだという顔をし、それを口に出していいもした人たちが、今度は急にうろろと周囲を見まわしはじめる。どこかに失敗の原因はないものだろうか、自分以外の場所に、その理由をさがしはじめるのです。一度や二度の失敗ならともかく、あまりそれが続くと、どうしてもそうせずにいられなくなりましょう。もちろん、理由は、かならず発見される。

このごろ成績が悪くなったのは、落ちついて勉強する自分の部屋がないためだとか、弟が生まれて泣き声に邪魔されるからだとか、両親の仲が悪くてシジュウその喧嘩ばかり見せられるからだとか、友だちが自分を裏切ったからだとか、探せば、理由はいくらかでも見つかるでしょう。

3、それらの理由は、その気になりさえすれば、いくらかでも拡大できます。その拡大工作が行きつく最後の地点が、

宿命というやつです。イデンと環境という二つの武器です。

成功したい、失敗したくないという気もちもたしかにあります。同時に、たとえ失敗しても、それが宿命的なものであり、必然の理由にもとづくものなら、諦めがつくという気もちも、私たちのうちにあるのです。この二つの気もちのかかわりあい、じつに微妙なもので、そのどちらのほうもより根本的なものであり、より強いものであるか、ときに判断がつかねることがあります。

みなさんは、こんなふうにおもうときはないでしょうか。どうせ失敗してしまったのなら、それが宿命的なものであって、自分の力でどうとりかえしのつくものでもないと考えたほうが、諦めがつきやすい、つまり気が楽というようなときが。なぜ気楽かといえば、自分の力でどうにもならない以上、みなさんはなにもなくていいからであります。これは怠惰と無気力の証拠であります。これが徹底しますと、いつそのこと早く失敗してしまったほうがいいと望みだすのです。失敗してから、そのあとで宿命の理由づけを求めるのではなく、まだ失敗しないうちに、早く失敗と破滅とにみずから急ごうとするのです。そして、この失敗と破滅とに急ぐ自分の気もちを理由づけするために、 を、あるいはそれに似たものを、あらかじめ用意しておこうとするのです。

その例を、私は戦争中にたびたび見聞きし、そのたびに不快感を禁じえませんでした。みなさんはおぼえているかどうか分かりませんが、もし知らなかったら御両親や先輩にたずねてごらん下さい。その例というのはこういうことです。戦争末期、私たちの家はいつ焼かれるかもしれない危険にさらされていました。昨夜家を焼かれた親兄弟が、早朝、鍋釜をぶらさげて、自分の家に避難してくる。その自分の家が、その夜に焼かれるという始末でした。そんなとき、よく人々が口にしたことばは、「家が焼けて、ほっとした」ということばであります。そういうあとで、かれらはその「奇妙な心理」をみずから分析して、こう考える。なぜほっとしたかというところ、同胞の家がかたはしから焼かれているのに、自分の家だけ残っていた、それが重荷だった、今度で、みんなとおなじ「無一物」になって「さばさばした」というのです。

それは事実です。ただ、私が不快を感じたのは、こんなときにも、「無一物」だの「さばさばした」だのという、一種の「同胞感」あるいは「ヒューマニズム」を理由づけに利用する心理であります。いまから考えれば、この理由づけのうそであることは明らかです。「無一物」になって「さばさばした」のは、同胞にたいしてではありません。自分にたいしてであります。当時は、ほとんどすべての国民が破滅への道を急いだのです。敗れたくないという気もちと同時に、おそらくそ

れ以上に、無意識のうちでは敗けてしまいたいという気もちをいっていたといえましょう。敗けて重荷をおろしてしまいたかったのです。勝とうという努力を放棄し、なにもかも投げだしてしまつたあとの、なにもなくていい気楽な状態を私たちは望んでいたのです。

4、責任からの逃避であり、自由からの逃避であります。自由とは、責任のことであり、重荷であります。自由であるためには、私たちの精神はたえず緊張していなければなりません。ある作品のなかに、こんなたとえ話があります。いま階下で宴会がおこなわれている。男は衣服をととのえて階段を降りています。なにか考へごとをしていたのでしよう。もうこれが最後のステップだとおもつた瞬間、案に相違して、その下にもう一段あった。男はおもわずよろめいて倒れる。ところで、この男は考へごとをしながらも、無意識のうちに、それまで一段一段、まちがいに階段を降りてきたので、そのあいだじゅう、かれの精神は自由だったのです。かれは自分の肉体の主人として、自由に自分を操り、自分の歩みを階段に適合せしめてきたわけです。が、最後の段だけが、かれの予想のそとにあり、かれを裏切つたのであります。その瞬間、かれは自分の肉体の主人ではなく、精神は自由を失つて、たんなる物質に転落してしまうのです。

D このたとえ話でわかるとおり、自由であるということは、たえず精神を緊張させていることを意味します。ちよつともユダンすれば、どんな不測の事態が起こつて、この階段の最後のステップのように、私たちの精神をすくいくるかも知れたものではあります。戦争ばかりでなく、事業にしろ、恋愛にしろ、夫婦愛、友情、その他どんなことがにせよ、よほどジュンブウに帆をあげて進むとき以外は、そしてそんなときはめつたにあるものではなく、事がすこしでも長びけば、かならず到るところに、この意地のわるい最後のステップが私たちを待ちかまえているものなのです。

それにひつかからぬために精神を緊張させているよりは、むしろ自由を放棄したほうがいいと考えるのも、無理はない話です。もちろん、私はみなさんに自由の放棄をすすめているわけではありません。ただ今日、自由ということばが、あまりにも安っぽく用いられているので、 ⑤

⑤ ということ、みなさんも、いざとなれば、自由など要らないといひだしかねないこと、私はそれを注意しておきたかったのです。

(福田 恒存 著「私の幸福論」より)

- ※1 怠惰……やるべきことをやらずに無駄な時間を過ごしている様子。
- ※2 同胞……ここでは、自分と同じ国の国民（日本人）を指す。
- ※3 無一物……財産と言えるほどのものを何一つ持たない様子。
- ※4 ヒューマニズム……人類愛。ここでは、自分以外の人々のことを思いやる心の意。
- ※5 抛棄……放棄。やるべきことをやらずに放っておくこと。
- ※6 適合せしめて……うまく合うようにさせて。

問一 || A～E のカタカナを、漢字に直してていねいに書きなさい。

問二 1 4 に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|-----|---|-----|
| ア | あるいは | イ | いわば | ウ | さらに | エ | しかし |
| オ | たとえば | カ | なぜなら | キ | また | ク | むしろ |

問三 —— ①「誰しもそうおもいたがるものです」とありますが、それはなぜでしょうか。その理由を問題文中の語句を用いて、四十字以内で説明しなさい。

問四 に入れるのに最も適当な語を、問題文中より漢字二字でぬき出して答えなさい。

問五 —— ②「この理由づけのうそであることは明らかです」とありますが、筆者はなぜ「うそ」と言っているのでしょうか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「家が焼けて、ほっとした」という「奇妙な心理」は、自分が重荷に感じていた自由を投げだしてしまったことを表しており、「さばさばした」のはみんなとおなじになつたからではなく、そういう自分にたいしてのことであるから。
- イ 「家が焼けて、ほっとした」という「奇妙な心理」は、本当は、みんなの家が焼かれているのに自分の家だけ残っていると心重荷から解放されて、これからは他人に気兼ねしなくてすむという気楽な心の状態を示しているから。
- ウ 「無一物」になつて「さばさばした」というのは、いわゆる「ヒューマニズム」を理由づけにしているが、多くの人が家を焼けて出されて財産を失い、苦しい生活を強いられることが「ヒューマニズム」などと言えるはずがないから。
- エ 「無一物」になつて「さばさばした」というが、当時はほとんどすべての国民が戦争に敗れたくないというより、むしろ敗けてしまいたいという気もちをいだくほど苦しんでおり、他人を思いやる心のゆとりなどなかったはずだから。

問六 —— ③「かれは自分の肉体の主人ではなくなり、精神は自由を失つて、たんなる物質に転落してしまうのです」とありますが、ここから読み取れる筆者の考えの説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自由を失った精神は、もともと自分が操るはずの肉体にその地位を取って代わられ、かえって操られてしまう。
- イ 精神が自由であれば、それは自分の肉体を自在に操る力を発揮するが、そのために精神はたえず緊張を強いられる。
- ウ 歩行中に精神が自由を失えば、それに操られていた肉体だけでなく、精神そのものも階段から転落してしまう。
- エ 精神を緊張させてばかりいるとやがて自由がなくなり、精神の持ち主は肉体の主人ですらいらなくなってしまう。

問七 — ④「■をすくいに」の■に入れるのに適当な、体の部分を表す漢字一字を書きなさい。

問八

⑤

に入れるのに最も適当な語句を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自由とは大変危険なものだ
- イ 自由とは大変高価なものだ
- ウ 自由とは大変重要なものだ
- エ 自由とは大変面倒なものだ

② 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。〈問題文は一部省略しているところがあります。〉

受験して中学校に入学したばかりの北村菜穂は、いきなり「ねえ、じぶんがもう子どもじゃないって思ったときって、いったった？」と話しかけてきた川田亜矢と友だちになり、ちょっと変わってて本好きの彼女にどんどん惹かれていく。亜矢は菜穂の13歳の誕生日を前に「永遠の12歳」が閉じ込められているというすてきな本をプレゼントしてくれ、それを読んだ菜穂はますます亜矢のことを好きになった。ところが、その誕生日のお祝いの席上、菜穂のママから突然——これから半年、料理の勉強のために一人でフランスに留学する——という爆弾発言があつて……

① じょうだんじゃない。

階段を一段あがることにそう思い、一段あがることにそう思う気持ちがつのつていく。

「菜、穂。階段をどんどんとさせるんじゃないやありません。静かにあがりなさい」

階下からママのどなる声が聞こえる。じぶんがなにを言ったかなんてすっかり忘れたみたいで、いつもどおりのどなる声。

どなるとき、ママは、菜と穂のあいだに短いプレスをいれる。

くやしくて、部屋にはいるとき、ドアを 1 バタンとしてやって。

1

ベッドに寝ころがると、かざりと音がして、亜矢のプレゼントの文庫本がわたしの顔にあたった。永遠の12歳。おだやかでなんの不安もなかったわたしの12歳は、物語といっしょにこの本のなかに 閉じ込められてしまったのだ。 ②

「菜穂が一年生のときだったかな」

ベッドのわきにひざをついて座って、ママがわたしに話しかける。ちいさいころのことなんて聞きたくない。わたしは天井をにらんだまま、からだを固くしていた。

「ママは大きくなったらなにになるの、って聞いてくれたことがあったんだ。もうおとなになって、専業主婦で、なにになりたいかなんて思いもしなかった。なにになったのって聞かれたなら、③ ってまちがいに答えられたけど」
 だったらそのままわたしのおかあさんやっててよ。こころのなかで言う。わたしのこころのなかの叫びなんて、いまのママには聞こえやしないだろうけど。

「菜穂、聞いてる？」

わたしはそつぽをむく。壁のほう。2 壁だけを見ると、目がくらくらしてくる。壁に吸いこまれそうになる。吸いこまれそうになりながら、壁のむこうに、吸いこまれてしまったさまざまな生き物が暮らしている別の世界があることを想像する。ひとりそこで生きていくことを想像する。でも実際にはけして吸いこまれることなどない。わたしはふてくされてベッドから動かないし、ママは話し終えたら——ママ自身がこれと言うことはないわってなったら——階下においていく。そして、状況はなにひとつ変わらない。

「かわいいな、そんなこと聞いてくれるなんて。ママはうれしくなって、菜穂を抱きしめようとした。そしたら、菜穂がすごく真剣な顔をしてママを見てたのよ。④ どきっとしたわ。なにかなることなんて、ママはもうとつくにあきらめてたのに、菜穂は真剣に聞いてくれるんだと思って。これからでも、ママでも、なにかなれるかなって、そう思った」

「ママはなにになりたかったの？」

そつぽをむいたまま、ちいさな声でわたしは聞いた。

「よくわからなかった、というのがほんとうのところだと思う。なにかとくべつな才能のあるような子どもじゃなかったし、あたりまえのように学校に通って、いつのまにか大学生になっていて。大学で、ママはフランス文学を勉強したんだけど、卒業すると、それとはまるきり関係のない銀行に就職して」

「意味ないじゃん」

3 ママはさびしそうに笑って、

「だって、それがふつうだと思ってたから」と、言った。

「でも、菜穂のそのひとことがずっと忘れられなかった。菜穂が小学生になって、ママにも時間があまるようになって、料

理の学校に通いはじめたでしょ。家事のなかでママは料理がいちばん好きだったし、家族においしいものを食べさせたいっていうのが動機だったんだけど、やりはじめたら、もつともつとて思うようになって。笑わないでね、ママ、料理人になりたいの。……あのときの菜穂に教えてあげたいな、ママはがんばって料理人になるから、応援してねって」

あのときのわたしだったら、がんばってねって言っただろうか。ママが半 year なくなるってわかってても、パパとふたりでがんばるから、ママもがんばってねって。

そうとは思えない。

「相談しないで決めてごめんね。でも、どうしても行きたいの。菜穂にわかってもらって行きたいんだ」

「ひきようだよ、ママ、ちいさいころの話なんか持ち出して。あたしが反対だったら行かないの？ もう決めてるんでしょ。」

あたしがなにを言っても行っちゃうんでしょ。もういいよ

「菜穂」

「もうおそいから寝るよ」

「そうね」と言っただけでベッドから離れ、ドアのところで「おやすみ」と言った。

わたしはおやすみを言わなかった。眠れるわけじゃないじゃん、と置いていたから。

午前十時の電車はがらんとしていた。

(中 略)

動く窓をじつとながめながら、わたしは、これからはじめて会う亜矢のおかあさんのことをぼんやりと考えていた。

電話の声だけでしか知らない亜矢のおかあさん。いつもおどろくほどのそつけなさで、わたしの電話を亜矢にとりついでしまふ亜矢のおかあさん。それは、そういうときのうちのママの愛想のよさとは対照的だ。

うちのママ。そう思ったとたん、鼻のおくがぎゅうんと痛くなった。ママのことをおこっているのに、⑥ そう思うとくやし

(中 略)

きみどり色のギンガムチェックのワンピースを着て、亜矢は改札口でわたしを待っていた。はじめて見る制服以外の亜矢は、わたしの知っている亜矢よりずっとおとなしそうに見えた。

「菜穂」

わたしを安心させようとするみたいに、顔中を笑顔にしてわたしを呼んだ。

改札を出て、小走りに亜矢のところまで行く。

「亜矢」と呼びかけたあと、なんて言ったらいいかわからなくなって、「暑いね」と言った。

「うん、暑いね。七分くらい歩くんだ。いい？」

「もちろん」

と、わたしは言った。

駅前の大通りをしばらく歩いてから細い道にはいると、いきなり住宅街になった。曲がる手前になると、亜矢が「こっち」と教えてくれる。

「あそこがうち」

とがった屋根が目立つ家だった。

「すてきなうちね」

「あたしが生まれたころ、パパがこたわつて建てたらしいんだ。パパは、いま、いないんだけど」

そりゃあ、平日のこんな時間にパパはいないよ。でも。

「うん。でも、なんか緊張しちゃうな」

わたしは、電車のなかですつと気になっていた亜矢のおかあさんのことを思い出してしまつて、そう言った。

「だいじょうぶよ」

と、亜矢は言った。笑いながら。

⑦ つめたい感じのひとつかと思つていた亜矢のおかあさんは、若くてきれいでやさしそうだった。

「はじめまして北村菜穂です」

「亜矢と仲良くしてくださいありがとうございます。ほんとによくいらつしやったわね。ゆっくりして行ってね」

「はい、おじゃまします。あの、これ、母の手作りのクッキーです」

こんな感じであいさつをしていたら、そばで亜矢が、「菜穂ったら、なに気取つてるのよ。もういいから、あたしの部屋に行こう」と、せかした。

案内された亜矢の部屋は図書室みたいだった。

(中略)

そのとき、ちいさくドアをノックして、亜矢のおかあさんがはいってきた。

本棚の前のちいさな丸いテーブルのうえに、おしぼりと麦茶とすいかを置くと、

「つめたいうちに食べてね。それから、お昼は下で三人でいっしょに食べましょうね。菜穂さんのおかあさんみたいに、お料理、じょうずじゃないんだけど」

と、亜矢のおかあさんは笑いながら言つて部屋を出ていった。

「亜矢のおかあさんで、電話の印象とぜんぜんちがうひとだね」

と、わたしが言うと、

「電話の印象って？」

と、亜矢が聞いた。

「なんて言ったらいいか……」

「そっけない？」

「て、いうか……」

わたしが「言いよんどんで」と、亜矢は笑つて、

「菜穂。そのとおりって顔してるよ。正直だねえ」

と、言った。

そう言われて、今度はこまつた顔をしたと思う。きっと。

「でも、実際のおかあさんはていねいでやさしそう。きれいだし」

「うん、でもママはいまでもずっと、個人的感情にとらわれてるからね」
⑧「こじんてきかんじよう？」

「そう。だから、電話での印象のほうが正しいかもしれない。しかたないんだけどね。さ、食べよう」
亜矢のおかあさんの個人的感情？

亜矢はそれ以上は言おうとしない。そしてわたしたちは、ちいさな丸いテーブルにむかいあって座った。わたしはテーブルとおそろいの木のいすに。亜矢は勉強机とおそろいのいすに。

おしぼりはひんやりとつめたかった。手をふくと、からだじゅうがさっぱりしたような気がした。
すいかをひとくち、口にいったのを、見計らったように、亜矢が話しかけてきた。

「大変だったんだ」

「うん」

と、わたしは答えた。

「せつかく亜矢にすてきなプレゼントをもらって、すごくいい気持ちだったのに。あたしも永遠に12歳だったらよかったよ」
「なに言ってるの、菜穂のおかあさん、すごくすてきじゃない」

ため息をつくように亜矢は言った。亜矢の息はすいかの匂い^{にお}がする。

「ほんとにすてきなおかあさんだよ」

と、もう一度言う。

ママのことをすてきなおかあさんだとみとめてもらうためにここに来たんじゃない、とわたしは思う。

「おこってるのね。亜矢にそんなこと言われたくないって顔してるよ」

「亜矢って、ひとの表情を言葉に変える趣味^{しゅみ}があるの？」

「ちっとも」

と、亜矢は言った。

亜矢のしゃべりかたはときどき魔法^{まほう}のようにわたしをひきつける。亜矢はきつとなにも意識しないでしゃべっている。だけど、すごくかわいかったり、すごくかつこよかったり、すごくすてきに聞こえたりする。

「ちっとも」

亜矢の言い方をまねて言ったら、わけもなくおかしさがこみあげてきた。気分は深刻なのに。でも夕べよりずっといい状態になったのは確かだった。

「相談事って、ふつう、どうしよう、どうしたらいいんだろうってするもんだよね。でも、わたしのはどうしようもない」

「そうとは思わないけど」

と、亜矢が言った。

「だって、無力な子どもだよ、あたし。今回のママは、もう決めてるって感じがする。あたしがどんなにたのんだって、もう変わらない」

絶望的な気持ちでそう答えたわたしに、

⑨「なに言ってるの、変わるの、菜穂、あなたよ」

と、亜矢が言った。

わたしはびっくりして亜矢の顔を見た。まじまじと。

でもそれは、お昼ごはんのあとに聞かされた亜矢の話にくらべたら、ぜんぜんおどろくようなことじゃなかった。

(石井睦美作『卵と小麦粉それからマドレーヌ』より)

問一 1 3 に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ぐいと イ じっと ウ そっと エ はっと オ ふっと カ わざと

問二 ~~~~~ a b c の語句の意味として最も適当なものを、それぞれ次のア、エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|--------------|-------------|--------------|
| a 「こだわって」 | b 「言いよどんで」 | c 「見計らった」 |
| ア 自分の好みを重視して | ア 言葉が出てこなくて | ア 見とどけた |
| イ 計画を間違え失敗して | イ 言い過ぎてしまつて | イ よい頃合いをねらつた |
| ウ たつぷり時間をかけて | ウ 言うのをためらつて | ウ 見落とした |
| エ たくさん費用をかけて | エ 言う機会をなくして | エ 相手の弱みを見つけた |

問三 次の文章を問題文中にもどすとしたら、どこに入れるのが最も適当ですか。そのか所の直前の文の終わり五字をぬき出して答えなさい。

ちいさいころからわたしはずっとママが大好きだったから。ママと離れることなんて、考えたことなかったから。考えるわけがなかったから。

問四 ——— ① 「じょうだんじゃない」とありますが、ここで「菜穂」は何に對していきどおっているのでしょうか。その

の説明として最も適当なものを、次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ママが唐突に菜穂のちいさいころの話を始めたこと。
イ ママがいつもどおりのどなり声で菜穂をおこつたこと。
ウ ママが菜穂たちをおいて半年もの間いなくなつてしまふこと。
エ 亜矢にプレゼントされた本のせいで不安な気持ちになつたこと。

問五 ——— ② 「閉じ込められてしまつたのだ」とありますが、これはどのようなことを表していますか。その説明として最も適当なものを、次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア おだやかでなんの不安もなかつた菜穂の12歳は、亜矢からプレゼントされた本によつて一変してしまつたということ。
イ おだやかでなんの不安もなかつた菜穂の12歳は、13歳の誕生日の出来事によつて昔の話となつてしまつたということ。
ウ おだやかでなんの不安もなかつた菜穂の12歳は、ママの告白によつて落ち着かないものになつてしまつたということ。
エ おだやかでなんの不安もなかつた菜穂の12歳は、13歳になつた今ではもう二度と思い出すことはできないということ。

問六 ③ に入れるのに適当な言葉を、問題文中の語句を用いて八字ちようどで答えなさい。

問七 ——— ④ 「どきつとしたわ」とありますが、「ママ」はなぜ「どきつとした」のでしょうか。その説明として最も

適当なものを、次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分がなにかになりたいのをあきらめていることを、菜穂に見ぬかれたと思つたから。
イ 菜穂が将来になりたいものについて、とても真剣に考えていることがわかつたから。
ウ 菜穂の本気の質問に気づかず、ついはいくらかしてしまふところだつたから。
エ 菜穂のかわいらしい質問に、これまでにないとおしさを感じたから。

問八 ——— ⑤「菜穂」とありますが、ここにこめられた「ママ」の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 菜穂が自分のことをよくわかってくれていることを、うれしく思いほつとする気持ち。
イ 菜穂はどんなに説明しても、自分の思いをわかってくれないというあきらめの気持ち。
ウ 菜穂のとてもない思いこみに戸惑い、何とか誤解を解いておきたいとあせる気持ち。
エ 菜穂の思いは理解しつつも、何とか自分の思いもわかってほしいというつらい気持ち。

問九 ——— ⑥「そう思うとくやしかった」とありますが、ここで「菜穂」がくやしがつているのはどのようなことですか。二十字以内で答えなさい。

問十 ——— ⑦「つめたい感じのひとつかと思っていた」とありますが、なぜ「菜穂」はこのように「思っていた」のですか。問題文中の語句を用いて、四十字以内で答えなさい。

問十一 ——— ⑧「こじんてきかんじよう」とありますが、これがひらがなで書かれている理由を考え、わかりやすく説明しなさい。

問十二 ——— ⑨「変わるの、菜穂、あなたよ」とありますが、ここで「亜矢」は「菜穂」にどのようなことを伝えようとしているのだと考えますか。わかりやすく説明しなさい。

*	*	*	*	*	*		*	*				
問八	問七	問六	問五	問四	問三		問二	問一				
	をすくいに						1	A				
							2	B				
							3	C				
							4	D				
								E				

*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		
問十二	問十一	問十		問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	
											a	1	
												b	2
												c	3

氏 名

受 験 番 号

得 点
*